

加島英国（吐洲）宛黄花庵升六書簡の翻刻と解題

― 都市の俳諧宗匠と地方俳人の関係 ―（解題篇）

湯 谷 祐 三

【加島英国の事跡に通底する理念】

江戸後期の白杵で活躍した加島英国（一七八二―一八五四）は、江戸期の「万能型」町人の一つの典型であろう。江戸期の町人階層が経済活動で得られた財力を文化学習方面に活用した時、いかに興味深い人物が出現するかを我々は目の当たりにする。今日、加島英国というと、まずは伊能忠敬の測量に協力した人物として、次に、質量ともに驚異的な年表『温故年表』の編者として紹介されるようだ。英国の活動は止まるところを知らず、『惣町役家先祖書』『格判医師先祖書』『諸職治系』などを藩に提出し、藩に関係する様々な職責を果たすなど、「藩政密着型町人知識人」といふべき性格も強い。

そうした多彩な活動を行った英国であるが、その学芸の出発点が「俳諧」であったというのは少々意外な感もある。

「蝶よ、花よ」と詠嘆するボエムの世界と、「測量」や「年表」といった実証の世界とはまるで相反するよう感じられるからだ。

しかし筆者は、英国が手がけた「俳諧」「測量」「年表」は、一見それぞれ別々の知的営みであるかのように見えて、実はそこに通底する理念は全く同一のものであると気づくに至った。それを述べる前に、まずは英国の生涯を概観してみよう^{*1}。

英国は天明二年（一七八二）正月十五日生誕、父英景、幼名里治、元服後弥平太と改名した。英国の文化的活動として最初に顕在化するのは俳諧の分野である。寛政十二年（一八〇〇）の『俳諧之伝系』に「綵雲亭吐洲」として連なり、享和二年（一八〇二）六月四日には「立机」して、無々庵嗅英より「無々庵」号を譲られ、「無々庵吐洲」と名乗る。

翌年正月十四日には渡辺南溟が「無々庵吐洲宗匠」へ「誓盟」を出している*2。

英国の『詩文集』によれば文化二年（一八〇五）に「同秋欲学易、離家之他郷」とあるから、易の学習は俳諧より遅れて始めたものである。同年には無々庵発句集『俳諧くちなし衣』、文化六年（一八〇九）には豊後の俳人の作品を集成分類した『俳諧豊後梅』を、文化十年（一八一三）には、芭蕉から黄花庵升六あたりまでの過去の発句を四季分類した『俳諧古今明題集』を編纂した。寛政十二年の『俳諧之伝系』より十三年が経過している。俳諧師吐洲としての英国の活動については後に更に言及する。

興味深いのは、俳諧に精進するのと同時期に、英国は伊能忠敬の測量作業に参加しているという事実である。英国の年表において最初に測量の件が出てくるのは、文化五年（一八〇八）六月十三日条で、「此度江戸表測量方伊能勘解由巡国二付、与州宇和島城下へ為聞合被差遣」、直接伊能忠敬より測量を伝授されたという*3。以後、測量関係の事跡は継続的に記録があり、文化十三年（一八一六）には「他邦掛合且公訴取調地所測量等、度々召仕候処、出精に付金百疋被下」（傍点筆者）とあり、以降測量関係事跡は希薄になるが、文政十年（一八二七）には「御城下御絵図被仰付」云々とあるように、その測量能力を継続して保持して

おり、信頼されていたことがわかる。

測量記事と入れ替わるように、文化十四年（一八一七）には「惣町先祖書記録御用被仰付」とあり、ここから英国の「年表」や「系図」の仕事が始まる。早くも文政二年（一八一九）には「温故年表」二冊・「惣町役家先祖書」八冊・「諸職役系」一冊・「町医師格判先祖書」一冊などの下書を提出するに至っている。以後これらの増補修訂に務めたのであろう、文政五年（一八二二）には以上全十二冊の清書本を木箱に入れて提出した。この時、英国四十一歳である。これ以降は、藩命による絵図や系図の作成、『温故年表』の幕府献上などの公用は枚挙にいとまがなく、「藩政密着型町人知識人」のお手本のような生涯を送り、嘉永七年（一八五四）閏七月十一日に七十三歳で病死した。

このように、英国の活動の多くが江戸後期の臼杵藩の行政や文化と密接に関連するものであるから、今後この時期の臼杵藩の動向が更に明らかになるにつれて、そこに英国の関与の跡が陰に陽に浮かび上がってくるのではないかと筆者は予想する。よって、英国の事跡に関する総合的研究が待たれるのであるが、一つ注意したいのは、それでは英国の文化活動とは、「あれもやり、これもやった」式の雑多なものだったのかという問題である。現状の紹介では、英国は「藩の命令で、測量もやり、年表も作った」異能の

町人というイメージであつて、そこには彼の理念というものが何も感じられない。

今回、英国の俳諧に関する書簡資料などを取り扱い、その上で英国の事跡を通覧して見ると、「俳諧」「測量」「年表」といった英国の活動の根底には、事物を「集成類聚」し、世界の全てを掌中に収めるという思想、収めたいという欲望が一貫して存在すると筆者は考えるに至つた。

一般的には「俳諧」というと、折に触れ花鳥風月を詠嘆して楽しむ感情的・情緒的な営みのように思われているかもしれないが、特に江戸後期の「俳諧」というのは、そのような印象とは全く別の側面を持っていた。

具体例を挙げよう。『南総里見八犬伝』などの「読本」作者として知られる曲亭馬琴には『俳諧歳時記』なる編著作がある（享和三年刊）⁴。これはその名の通り、「俳諧で、季語を四季順に整理、分類して解説した書物」（『広辞苑』「歳時記」の項目）で、今日でも同様のものが何種類も刊行されている。

こうした「歳時記」を見ると、四季にわたる日本の自然と人事が集成類聚されていて、自分が知らなかった自然現象や行事の存在を知ってまことに楽しいものである。俳句を詠む、詠まないに関わらず、「歳時記」によつて「日本」を知るといふ側面があり、「歳時記」には「日本」を網羅

するという性質があることがわかる。何故、「俳諧」にそうした性格があるのかというと、「俳諧」で使用する言語には原則として制約がない。「俳諧」は伝統的和歌世界で使用されてきた歌語に加え、漢語から俗語まで、およそ日本人が口にする言葉は全て使用できるということになっており、それは言葉で表現されるすべての事象を取り扱うことができるということと同義でもある。

今日もつばら読本作者として知られる馬琴は、三十代まではしばしば俳諧に遊んでおり、言わばその「集大成」が『俳諧歳時記』の編纂であつた。馬琴の興味が、「俳諧」そのものよりも、「俳諧」が要求する自然と人事の集成類聚に向かつたという点で、加島英国の活動を考える上でも参考になる。「俳諧」には、単なる詠嘆的詩作に止まらない、言葉による「世界知」の類聚という側面があるのである。

そうした意味で、文化年間後半、比喩的に言うくと、「昼は測量、夜は俳諧」という具合に、英国が「俳諧」と「測量」を同時期に行つていたというのは興味深い暗号である。その俳諧も、同好の士と歌仙を巻くというよりは、『俳諧豊後梅』（文化六年）や『俳諧古今明題集』（文化十年）など、一人机上で行う類聚編纂作業によつて出来るものが目につく。前者は豊後俳人の作品を四季別に類聚したものであり、後者は芭蕉から升六までの作品をやはり四季別

に類聚したものである。英国の関心も、馬琴と同様に、俳諧の実作そのものというよりは、言葉による「世界知」の類聚へと向かっていたことがわかるのである。

このような関心で見ると、一方の「測量」という活動の意味合いも、新たに定義し直すことができるようである。それは「今日的に見ても驚くほど正確な測量を実現した」などと、単に技術上・科学上の興味深い事跡という表層面に限って評価すべきものではなく、その本質は、図像によって「世界」を平面空間上に集成類聚し、掌中に一覽するという行為、欲望なのである。これは言葉によって「世界知」の全てを集成類聚して手に入れようとする「俳諧」の営みと軌を一にする。

文政年間に入り、英国の活動が「年表」や「系図」に向かうことも、そうした「理念」を踏まえれば、すべて共通し繋がったものとしてとらえなおすことができよう。「年表」こそ、編年という唯一のオーダーに従った、言葉による「世界知」の類聚行為に他ならない。『温故年表録』が横軸を編年とし、縦軸を「諸国」「御家譜」「御領内」などと階層区分しているのも、『歳時記』がまず春夏秋冬に分け、次に一月・二月……と細分化し、更に自然や人事を分けて記述していくのと類似した発想である。

また「系図」というものが、人間関係の集成類聚である

ことは最早言うまでもないが、加えて、「年表」の編年が「横」に進行するのに対して、「系図」の編年が「縦」に進行するものであるということも、改めて興味深い現象である。「年表」と「系図」は一对となつて「世界史」を網羅するのである。

加島英国が、言葉や図像を集成類聚することによって「世界」を「再構成」し、掌中に収めようとする数々の営為に没頭したことについては、もちろん英国自身の素質によるものであり、また藩の要路の理解と協力が不可欠であったことは否定できない事実である。しかしこれに加えて、英国が俳諧師として文化的活動を開始したことが、言葉による世界知の獲得という点で、英国の才能をいたく刺激し発展せしめる契機になったのではないかと筆者は考えている。

【加島英国の俳諧活動】

習学期間はひとまず置き、英国の文化活動の社会的な始まりが、俳諧師としてのそれであったというのは興味深い事柄である。英国十九歳、「寛政十二年（一八〇〇）申秋五月上浣日」の前掲「俳諧之伝系」には、「貞徳一季吟―芭蕉―其角―半時庵淡々―深茂亭舍梓―八千房駝岳―綵雲亭吐洲―…」と列記されている。この事から、英国（吐

洲)が大坂の俳諧師半時庵松木淡々の系統、所謂「八千房系」であつたことは明白である⁶⁵。続いて享和三年(一八〇三)には渡辺南溟が「八千房駝岳尊師無々庵吐洲宗匠」へ「誓盟」を出しており、二十二歳の吐洲はやはり八千房系で、既に「無々庵」を名乗り、「宗匠」と呼ばれていたこともわかる。

以後は地元を中心に俳諧の活動を行っていたのであろうが、その実態は必ずしも明らかではない。肝心の八千房系の俳諧宗匠からの書簡などは見当たらず、具体的にどのような俳諧指導を受けていたのかわからない。しかし、前述の文化六年(一八〇九)の編著『俳諧豊後梅』はそうした活動の「総括」であつたと筆者は見ている。これにより、英国はともかくも豊後俳人の作品を四季別に総覧することができた。そして、まさにこの文化六年より、英国は新しい俳諧宗匠との関係を開始することになった。それが大坂の俳諧師黄花庵升六である。

黄花庵升六は二柳門の俳諧師で高津宮近くに住んでいたという。寛政から文化年間にかけて多くの俳諧書を刊行し、「大坂俳壇の雄」とされる人物である。後述の各書簡で名乗っている「正風道場」とは、「蕉風」は「蕉風」でも他の「偽蕉風」(?)とは異なる、「正しい蕉風」「正統な蕉風」を鼓吹する道場というような意味合いであろう。一茶と親

交があつたことでも知られる⁶⁶。

本稿は、この大坂の正風道場黄花庵升六から臼杵の吐洲こと加島英国に宛てた書簡計十一通(卷子一卷に装丁)の内容を紹介することを主眼とするが、予め本稿の意義について述べておきたい。第一にこれらの書簡の内容分析により、臼杵の吐洲のような地方の俳諧師と、大坂のような都市の俳諧宗匠との関係が如実にわかるといふ点である。

書簡に共通する主要な用件は、入花料(投句料)を添えた発句作品の入句(投稿)の依頼である。それは通常、月例の「月並句合」への投稿依頼であるが、時に「万句合」といった大規模な臨時の催しの場合もある⁶⁷。

また、升六主催のものは勿論のこと、升六の知人や弟子の俳諧師の企画への入句も従憑される。勿論全て有料である。依頼を受けた吐洲は、自身の詠作を投稿するだけでなく、臼杵の愛好者の投句(及び投句料)を取りまとめて送るといふ役割を担っている。いわば「正風道場臼杵支部長」という立場である。

その他、正月の特別頒布である「春興摺物」の人数分の買取や、升六が一般販売用(売本)として時々刊行する版本の宣伝なども吐洲への書簡に記されている。こうした「集金システム」以外の内容としては、升六の「俳諧指導」がある。これは主に自身の近作(発句)を手紙の後半に列

記しておくというもので、「正風道場」の現在の「模範作」を示すといった意味合いだろう。

数は少ないが、自分の発句などを題材として自身の俳諧理念を語るといふ記述も見られる。ここでは「芭蕉七部集」の最期に位置する『続猿蓑』の最初の発句（八九間空で雨降る柳かな）などが取り上げられており、升六が理想とする「正風」なるものが、芭蕉が晩年に強調していた「軽み」に関連したものであることと推測される⁸⁾。

以上、升六の十一通の書簡から、大坂の俳諧宗匠が地方の俳諧師とどのような関係性を築き、どのように発句と資金を集めていたかが判明する。加えて、俳諧史研究上の興味として、吐洲と黄花庵升六との関係に言及するのは本稿が初めてであること、そして、今回の手紙の分析によって、升六の没年が従来言われているような文化十年や文化十三年ではなく、文化十一年と訂正し得たことなども本稿の成果の一部である。

【吐洲宛黄花庵升六書簡一卷について】

今回取り上げたのは、臼杵加嶋家文書の資料で、端裏に「大坂俳諧宗匠黄花庵升六」と墨書された書簡集一卷である。ラベルに「A4-37右表3」とあり、縦一七・〇糎×九四五・〇糎で、合計十一通の升六書簡が合装されてい

る。その内容を一覧すると次の表の通りである。整理の都合上、各書簡に【1】から【11】の番号を付した。またその推定年次は、書簡の内容から今回筆者が解析したものである。それによれば、升六の書簡は文化六年三月から文化十年十一月に及んでいるので、その推定年次順に並べ替えた年表も作成した。以下の各書簡解題は、この年表順（推定年次順）に記述していくので注意されたい。

◎「大坂俳諧宗匠黄花庵升六」書簡集一卷内容一覧

番号	差出↓宛先	日付	推定年次	根拠・作品
【1】	正風道場↓ 吐洲・嗅英	三月十五日	文化六年	『柳草紙』・『二葉草』
【2】	黄花庵↓ 無々庵	正月二十五日	文化九年	『流行百家句集』・『新深川集』
【3】	升六↓吐洲	臘十四日	文化七年	『流行百家句集』・『三歌仙』
【4】	正風道場↓ 無々庵	四月朔日	文化八年	『流行百家句集』・『愚撰之万句』
【5】	正風道場↓ 無々庵主人	五月八日	文化九年	『流行百家句集』・『新深川集』
【6】	正風道場↓ 吐洲	七月十日	文化九年	『新深川集』 売本
【7】	升六↓吐洲	九月十一日	文化九年	『明年類題十万句』
【8】	正風道場↓ 吐洲	七月二十二日	文化十年	『当庵十万句』

【9】	升六↓吐洲	十一月十五日	文化十年	「はやめてたく十万満尾」
【10】	升六↓吐洲 (?)	なし	?	「達磨忌や冬の天気も菊の花」
【11】	升六↓吐洲	四月九日	文化九年	『流行百家句集』

◎「大坂俳諧宗匠黄花庵升六」書簡集編年年表
文化六年 三月一五日【1】—『柳草紙』刊行、『二葉草』

計画。

文化七年一二月一四日【3】—『流行百家句集』計画

「春哉柳ささうし三歌仙」、

「寅の巻」販売。

文化八年 四月 朔日【4】—『流行百家句集』計画。「愚

撰之万句」

文化九年 正月二五日【2】—『流行百家句集』計画、『新

深川集』計画。

同年 四月 九日【11】—『流行百家句集』刊行?。

「当庵十万句（中略）速

二開卷」

同年 五月 八日【5】—『流行百家句集』刊行、『新

深川集』刊行。

同年 七月一〇日【6】—『新深川集』売本刊行。

同年 九月一日【7】—「明年類題十万句」

文化十年 七月二二日【8】—「当庵十万句」当節七万目

「九月には十万満尾」

同年一二月一五日【9】—「はやめてたく十万満尾」草

庵明年月並は趣向立替」

年次不明【10】—「達磨忌や冬の天気も菊の花」

自解。

文化六年（一八〇九）三月一五日【1】解題

【1】の年次比定は、「扱柱石社春哉、柳草紙と申一集、

致粹行候」とあるのが根拠となる。『柳草紙』には刊記は

見当たらないが、「文化六と算る春むつみ月、正風道場に

して升六書」と、文化六年正月の序文があることにより、

文化六年の刊行と考えられるから、本書簡も文化六年三月

十五日のものとみてよいだろう⁹⁾。

この「柱石社春哉」とは升六と関係する俳人のようで、『柳

草紙』冒頭には春哉・升六・玄蛙らの歌仙が置かれている。

書簡末の尚書に、「ふた葉草料月並花賈髓ニ請取申候」と

ある『二葉草』は、升六が毎年刊行していた類題句集であ

る。「ふた葉草料」とは、『二葉草』への入句料というよう

な意味であろう¹⁰⁾。

さて、書簡の内容に入ると、「草庵之風雅、日を追て

盛んに相成り、去冬より白嶺江北之両社加増、今は及七社、月並二月は三千百余嘯ニ相成り申候。御随喜可被下候」などである。二月のひと月で月並投稿句が三千百余りも集まったというから大変な数である。仮にひと月三千句としても一年に三万六千句という数が集まることになり、これに一句あたりの投稿料をかけ合わせたものが、「草庵」の基礎収入ということになる。

後述のごとく、今回の吐洲らの投稿は二月二十五日に着いたようで、「月並御入句二月分にも間二合不申、当月加入申候」と三月分にまわされることになったが、「乍併開卷十九日丁摺出来、二十五日ニ^(紙)は月並貴答跡便二可申入候」と、十九日には「丁摺」完成の予定で動いている。三千を超える投稿句を毎月こうしたペースでさばくというのも大変なエネルギーである¹¹。

また正月の摺物についても、「当春興摺物ニ御句致加入候処、摺物職かた大二隙入、漸此頃出梓候。急キ晋上申度、則御銘々ニハ四葉宛御落手可被下候」と、三月になって漸く刊行されたようである。「御銘々ニハ四葉宛御落手」とあるから、吐洲・嗅英の二人で四枚宛、計八枚送ってきたのであろう。そうすると吐洲・嗅英は自分用の一枚に加えて、各人三枚ずつ誰かに販売せねばならぬということになる。つまり「割当」である。その代金についても、文

末の尚書に、「尚々摺もの入用一人分五匁か、り申候」と、抜かりなく値段が書いてある。この「一人分」というのが「御銘々ニハ四葉宛」即ち一人摺物四枚分の代金ということであれば、摺物一枚は一匁余りということになる。

書簡冒頭で、正月五日付の白杵の吐洲の手紙が二月二十五日に大坂の升六の元に着いたというから、およそ五十日かかったことになるが、【2】では十二、三日で着いており、配達期間に随分と開きがある。これは大坂方面へ行く知人などに託して届けてもらうのと、飛脚便などの業者を利用することなどによる相違か。

この書簡の段階では、まだ吐洲・嗅英の二人連名宛先となっていることにも注意したい。これに接続する【3】では、「嗅英子返書御断申候。貴庵より宜御致声頼入申候」と文通の相手を吐洲一人にすることを述べている。白杵の束ね役、いわば「支部長」が嗅英から吐洲に変わったということであろう¹²。

文化七年（一八一〇）一二月一四日【3】解題

【3】は冒頭から「風雅御執心甚感し入候へハ、乍不及貴庵を正風道場西国の探代とせずんハあらしと存候」などと、大いに吐洲を持ち上げている。このことは文末の「嗅英子返書御断申候。貴庵より宜御致声

頼入申候」と、嗅英との文通を断るといふ記述とも呼応している。今後は臼杵における正風道場の「支部長」を吐洲一人に任せるといふことであろう。それにしても「正風道場西国の探代」とはよく言ったもので、こうした地方弟子の心をくすぐるような口達者な調子も、「宗匠」としてやつていく重要な素質の一つであったようだ。

一方で、吐洲の句「橋ひとつ見えて夕日の柳哉」について、「柳を水辺となす所、当時の流行にあらず」（柳を水辺に取り合わせるのは現在の流行ではない）と否定した上で、次のような升六の「俳論」が述べられる。

今の流行といふハ、人の仕来り候ふることをせず。いやミぬめりなくしてさら／＼とやすく、しかも一節をこめて故翁元録（元禄）の格調の中にて、すぐり立たるよき処をなすを則流行とは申なり。世人のいふ流行にハあらず。是正風道場の流行としるへし。

一種の「流行論」で、その大意を現代語で言えば、「今わたしが言う流行とは、人々がやってきたようなことをせず、「いやみ」や「ぬめり」を無くして、「さらさら」と軽く詠み、しかもこの一芸において芭蕉翁の格調の中でも選りすぐりのやり方をするのを流行と言うのです。世の人が

言う流行ではありません。これが正風道場の流行なのです」といふような意味であろう。芭蕉を崇仰しつつ「さらさらとやすく」詠むことを目指すというのである。

その例証として、芭蕉の「八九間空て雨ふる柳哉」（元禄七年）を挙げ、「柳より西に成たる小雨哉」、「いくたりも旅人通る柳哉」、「北国は日和すくなき柳哉」と、「十ヶ年程前」から去年までの自作の柳の句を並べている。

芭蕉の「八九間」句というのは、「七部集」の最期に選ばれた『続猿蓑』の巻頭句であるが、今日一般に芭蕉の句として人口に膾炙しているとは言い難い。しかし当時の升六などは、芭蕉がその晩年の書簡で繰り返し説いた「軽み」の具体例として、この句を考えていたようである。こうした芭蕉句に着目し、それに触発された句作りを志向しているという点は、升六の特徴として認めてよいだろう。地方の弟子に対して、「正風道場西国の探代」などと持ち上げる一方で、自身の信条に基づいた「教育」もやっているのである。

さて、書物の刊行等についてであるが、「百家句撰、御内意致承知候」とあるのは、文化九年刊行の『流行百家句集』のことであろう。この段階から計画されていたことがわかる。また「春哉柳さうし三歌仙晋上申候」とあるのは、【一】で言及した文化六年正月自序の『やなき草子』所収の三歌

仙の抜摺であろう。

「寅の巻差下し申候。御入句可被下候」とあるのは、文末の「尚々、ふた葉草并二月並入料別昏之通り、請取申候。寅の巻も料ハ四匁五分ニ御座候」とあるのと考え合わせる必要があるが、この「寅の巻」が何を指すのか、今のところ筆者は断定せずに置きたいと思う。【1】の項目で述べたように、『二葉草』は毎年刊行されていたようであるから、その「寅」（文化三年丙寅）を指す可能性がある一方で、尚書に「ふた葉草并二月並入料別昏之通り、請取申候」とあるように、『二葉草』の代金は既に升六は受け取っており、その他に「寅の巻」の料金が「四匁五分」だと言っているから、『二葉草』と「寅の巻」は別のものであるかのような書きぶりでもある。そうすると秘伝書としての「寅の巻」を言う可能性もあろう。

ところで「豊後高田春波スリモノ入貴覧申候」というのも引かかる記述である。豊後高田というのは国東半島の付け根に位置する町で、春波はやはりかの地の升六門の「支部長」なのかもしれない。ただ、高田は臼杵の隣町というほどではないにしろ、同じ豊後国であることには相違なく、まして大坂よりも近いことは言うまでもない。それにも関わらず、豊後高田の春波が出した摺物を臼杵の吐洲は大坂の升六を経由して受け取っているのである¹³⁾。

何故春波は、同国の吐洲に直接摺物を配らないのか。どうやら、地方俳人たちは同門で近隣に居住していても、「横のつながり」というものは案外希薄ではなかったか、各地の「支部長」は都市の宗匠と直接やり取りするだけで、近隣の「支部長」とはあまり交流がなかったのではないかと想像されるのである。これについては文化九年の「万句興行」の発端のところで再度触れることになる。

ここで升六の俳諧理念に関連して、年次不詳の【10】について述べておこう。これは升六が自作の「達磨忌や冬の天気も菊の花」について自ら解説したもので、月日も無く、「書簡」とするには躊躇されるが、整理の都合上通し番号をふっておいた。恐らく何らかの書簡に同封されて送られてきたものか。それはともかく、終始升六の俳諧の考え方を述べており、さほど長いものでもないで、次に全文現代語にして紹介する。原文は翻刻を参照されたい。

わたしの撰句の基準については、この句からも御勘考ください。この菊は秋の菊ではありません。所謂「寒菊」です。この句は少しも達磨忌くさくなくて、しかも禅気を含んでいます。「菊」は秋に限るといつても、冬にも「寒菊」という冬の菊があります。仏教の「悉有仏性」という概念からすれば、どれも仏種を持たな

いものはないという見識で、禅録を読みこなして、柳は緑、花は紅であると知るのです。達磨忌には、これまでに常套句として言われてきた表現を使わず、千鳥には海のあるこれをつけず、小春には春のような事を言わないようにする時、自然と「古み」は抜けていきます。穴かしこ。

升六の主張として明らかに読み取れることは、ある事物を表現するのに常套の文句を使わない、また常套の取り合わせをしないということであろう。確かに、「達磨忌や冬の天気も菊の花」のように、いかにもサラリとして軽い感じの詠みぶりではあるが、逆に、一句の眼目がつかみにくい作品になりやすい傾向もあるのではないか。

文化八年（一八一二）四月朔日【4】 解説

【4】の冒頭に「閏月念二発之花簡、今朔日花屋庵より相達申候」と、閏月の二十二日に出された吐洲の手紙を、四月朔日に着信したことが書かれている。文化年間閏月は、文化二年閏八月・文化五年閏六月・文化八年閏二月・文化十年閏十一月である。更に文中に「流行百家集、遠国之社中、同時にあまた出草之事故、はからず百家二あまり申候。遠国無抛事故、皆々及加集。多用中

なれとも此節草稿書終り申候」とあり、この「流行百家集」とは文化九年刊の『流行百家句集』と考えられる。以上の二点より、本書簡は文化八年四月朔日のものと推定できらる。

「花屋庵」とは升六の元に寄せられる手紙や投稿の取次をやっているらしい菅沼奇淵（一七六五～一八三四）のことであろう。升六と同じく二柳門で俳諧書を多数刊行している俳諧師である（【7】では「寄淵」と表記される）。

さてこの書簡には、「万句」をめぐる興味深い記述があり、すこし長くなるが次に掲げてみよう。三つの「万句」が話題となっているため、あえてそれぞれの部分で改行して示す。

愚撰之万句、当年は凡十二三万も相見え、今より胸つかへ申候。

雲州清水寺万句、当時六七万も相集り候様子に承り申候。いまた巻はまいり不申候。貴家御取次、百九十章入花九匁四分髓ニ落手、間ニ合候へは、早速相届可申候。

扱備後尾道万句、浪花升岳、三万句ちらし、差下し申候。御世話頼入申候。升岳寄ハ高判集類題ニ仕立申候。且両処ともはや追々寄かけ候へは、寄次第三四度にも

入卷之積二候間、早々御出草可被遣候。

三つの「万句」とは、「愚撰之万句」「雲州清水寺万句」「備後尾道万句」である。まず「愚撰之万句、当年は凡十二三万も相見え、今より胸つかへ申候」とあり、正風道場では月並投稿以外に「万句」の募集もやっていたようだ。「当年は」とあることから、今年から始めたことではないだろう。それにしても四月朔日に既に「凡十二三万」とは、升六でなくとも聞いただけで「胸つかへ」る数である。

ところで、翌年の文化九年四月九日と推定できる【11】に「当庵十万句、意の如く当三月十一日、速ニ開卷」とあるのは、この「愚撰之万句」の結実を知らせるものと考えられる。およそ一年で十万句を集めてしまうのである。

升六は続いて文化九年九月にも「草庵大望有之、明年類題十万句集致發行候」と、またもや「十万句」を企画し【7】、やはり翌年の十一月には「はやめてたく十萬満尾之事二候」と予定通り成就しているが【9】、升六にとつては「十万句」も最早例年の恒例行事のようになっていたのではないかとすら思わせる取りさばきぶりである。

次に「雲州清水寺万句」とは、出雲の古刹清水寺（島根県安来市）における奉納興行であろう。「当時六七万も相集り候様子」というから、やはり「十万句」を目指すよう

である。「貴家御取次、百九十章入花九匁四分銚ニ落手」とあり、吐洲は投稿句百九十句及び「入花料」（投稿料金）の「九匁四分」を取りまとめて升六に送っている。

この興行自体は升六の主催でないようだが、恐らく知人の俳諧師に協力を求められたのだろう。そうした場合、宗匠は自分の地方弟子にも触れを出し、広く出句を募るのである。ところで、【11】の書簡中に「雲州何某一人にて三万出草有之、前代未聞之珍事也と人々申あへり」と、升六主催の「十万句」に一人で三万句出したという「何某」も、雲州の住人であるからには、この清水寺の興行とも無関係ではないだろう。

三つ目は「備後尾道万句」である。これについても升六は、「浪花升岳、三万句ちらし、差下し申候。御世話頼入申候」と出句の取りまとめを吐洲に依頼している。この万句に関係しているらしい「浪花升岳」とは、【2】の書簡中に「門人升岳三万句存立ちらし晋上申候」とあるから、升六の「門人」である。升六は門人の関係する万句興行についても、吐洲のような地方の門弟に出句を依頼するのである。門弟としては、たとえ作品が出来ても、一々これに「入花料」を添えて送らなければならないから、度重なればその負担は少くない。結局、吐洲は少なくとも年内中にはこの依頼に応えなかったことが、次の【2】でわかる

のである。文中に「升岳寄ハ高判集類題ニ仕立申候」とある、この「高判集」というのは、「高判集とは、上方で享保から天明にかけて流行した高点付句集のこと、点取歌仙などの批点連句から、高点を得た秀逸な付句を抜粋したものである」とのことである。¹⁴⁾

文化九年（一八一二）正月二十五日【2】解題

【2】の年次については、「百家句選だにまた草稿ならざる程之事ゆへ」とか、「幸二百家集いまた間に合候故、嬉しきハかり候。二十七句致加集候」とあるのが目につく。この「百家句選」や「百家集」というのは、文化九年刊の『流行百家句集』を指すと考えられ、その完成直前の様子を伝える文面であろう。また、「当年は新深川集ト申、附合の買本も出し申候」というのは、やはり文化九年刊の『新深川集』のことであろうから、以上の二点を根拠として、本書簡は文化九年正月二十五日のものと考えられる。

大坂の正風道場では、「風雅は追々増長、当正月月並杯も三千五十嘯、前代未聞之大寄ニ御座候」とあり、正月だけで「三千五十嘯」という数の多さにも驚くが、三年前の文化六年二月における、ひと月「三千百余嘯」（【1】）というペースが維持されており、「月並」投句熱がまだ健在であることがわかり、まさに「浪華は今俳諧の昼ニ御座

候」という活況である。だから、「新連なども御取立被成、数組御取次可被下候」と、更に「新連」（新規投句者のグループ）をどんどん取り次いでくれなどと依頼している。

例の「教育的俳論」としては、次のような記述がある。

丁摺一組晋上申候。当卷頭、松むしり万歳の妙を御覽可被成候。松むしり一向なき物を流行に御つくりとよく案し付申候。万歳是もふるミをすつはり離れなん、この三字に大家の広庭、梅も椿も多樹にして、万歳の腰をち、め恐入たる御事見るか如し。海内の風雅大ニ及高趣、雀躍申候。

その丁摺の実作がどのようなものかわからないので、あくまで推測であるが、「松むしり一向なき物を流行に御つくりとよく案し付申候。万歳是もふるミをすつはり離れなん」とあるところを見ると、歌仙において、吐洲が「松むしり」（松雀鳥）なる耳慣れない鳥の名を使用したのを受けて、升六が「万歳」を使った付句をしたものか。「海内の風雅大ニ及高趣、雀躍申候」などは、どうやら吐洲を持ち上げるだけでなく、自画自賛の傾向もかなり強いようである。臆面もなく自賛の言葉を並べ立てるといいうのも、都市の宗匠としてやっていくための必要な性格であるらし

い【6】や【8】も参照。

その他、「尚々摺物料銀拾匁、慥ニ落手申候」という記述は、春興の摺物の料金であろう。吐洲と嗅英の二人で計八人分を計十匁で引き受けた【1】の例から類推して、今回は吐洲一人で八人分を引き受けたとみえる。この時の吐洲の手紙は、「当正月三日御認之貴書、速に当十五日相達申候」とあるように、白杵から大坂までわずか十三三日で到達している。これはおよそ五十日を要した【1】と比べて各段に早い。こちらは飛脚便を使ったものか。

また、「門人升岳三万句存立ちらし晋上申候。御世話可被下候」とあるのは、門人の升岳が集めている万句への投稿取りまとめ依頼であろうが、昨年四月朔日付の【4】でも同様の依頼をしていることから、少なくともこの時まで、吐洲は依頼に応じていないようだ。吐洲とて毎回いい顔はしていられないのであろう。

文化九年（一九二二）四月九日【11】 解題

【11】には「御国少し百姓騒動有之由、御心配察入候」とあり、白杵の「百姓騒動」は文化八年十二月から翌年正月であるから、本書簡は文化九年四月九日のものであろう。「当庵十万句、意の如く当三月十一日、速ニ開卷」という、この「十万句」が、【4】に出る「愚撰之万句」の成就を

知らせるものであることは【4】で述べた通りで、升六は一年足らずで「十万句」を集めている。

「九国子便之貴書相達候」とあり、「九国子」なる人物が吐洲の手紙を持参したようだ。この人物は、「則九国子一心開卷之砌出席二候」とあるから、「一心」（恐らく一心寺か）での「開卷」にも出席しており、やはり九州出身の俳諧愛好家であろう。

なお「十万句」は、「開卷」したといっても、「かくて月々一卷宛開卷申候」とあるように、一度に全体が「開卷」されるわけではないから、「若御出草ならば年おくれにならざる様、御出句可然候」などと、いまだに投句を勧めている。「十万句」の全体が揃ってから開き始めるのではないことがわかる。ただ、そうこうしている内にも、九月には早くも「明年類題十万句」【7】などと、翌年の「十万句」の企画が告知されているのである。

また、「百家句集、段々延引、漸出版一部晋上申候」とあるのは、『流行百家句集』が刊行されたことを述べているようだが、この書簡に接続すると思しき、およそひと月後の五月八日付の【5】に「百家集ハ七月にもか、り可申候」とあるのはやや不審である¹⁵⁾。

文化九年（一九二二）五月八日【5】 解題

【5】には「新深川集、今四五日之うちには出来と存候。百家集ハ七月にもかゝり可申候」とある。『新深川集』は文化九年刊行であり、「百家集」というのもやはり文化九年刊行の『流行百家句集』であろうから、本書簡は文化九年五月八日とみてよいだろう。『新深川集』の計画は今年正月の手紙で「当年は新深川集ト申、附合の買本も出し申候」(【2】)と明らかにされていたから、五か月程度で刊行となった。

冒頭「四月十五日発之貴簡、当六日相届申候」と、四月十五日白杵発信書簡が五月六日に大坂に着いているから、およそ二十一日間かかっている。升六はそれから二日ほどで本書簡を認めて出したということになる。十七首ほど自作句を並べた後で、「貴庵事は格別ニ含ミ居候へは、野句よしあしのわいためなく、底を叩てしるし申候」と、例によつて弟子の心をくすぐるような言辞を弄している。「あなたならわかる」「あなたにだけ教える」といった語調である。

その他、「御地之産物海雲一桶」と吐洲が升六に贈ったのは、塩蔵の「もずく」であろうか。その返礼なのか、升六は「出羽秋田の便りありて摺もの参候故、遠国之品故、入貴覧申候」とわざわざ出羽や秋田からの摺物を吐洲に送っている。そのような遠方の俳諧愛好家とも升六は繋

がっていたのである。

文化九年(一八一二)七月一日【6】 解题

【6】には、「新深川買本出梓、貴句致加入置候」とあり、『新深川集』は文化九年刊とされているので、本書簡は文化九年七月十日のものと考えられる¹⁶。これに関して末尾の尚書に、「深川賣本句入候かた四匁三分可被遣候」とあるのは、『新深川集』に自分の句が入れられた人は、「四匁三分」を送ってくれというのであろう。

ところでこの「賣本」(売本)とは何だろうか。『新深川集』の企画を告げるこの年の正月の書簡には「当年は新深川集ト申、附合の買本も出し申候。書林目録入御覧申候」(【2】)とあるから、「売本」(うりほん)でも、「買本」(かいほん)でも、概念としては同じものであるようだ。「書林目録入御覧申候」と言っていることからすれば、これは門弟内や関係者間でのみ頒布・流通する配り物ではなく、「一般販売用書籍」といった意味合いであろう。『新深川集』の場合、「附合の買本」とあるので、「俳諧附合マニュアル」というような内容だろう。升六はこうした一般愛好者向けのマニュアル本を出して名声を高め、新たな門弟の獲得をはかると共に、そのマニュアルにも門弟の句を掲載することで、彼らからも謝金を徴収していたのである。

この『新深川集』の附合については、例によって自画自賛気味の自解を長々と開陳しているので、次に掲げてみよう。

此附合、当時之流行、道場之野風、御賢覽可被下候。聊老骨を入置候処、恋の句などに世間通用之恋の詞を用ひす恋を持せ候自つ事（実事？）、附かたの遠くして、一体あるあたり、一卷之変化なんとに、御心を可被附候。御不審之事もあるへく候。無御遠慮御尋可被成候。正答にこまるやうな事は決而無之候。御当座之御句おもしろく、段々当調にうつり申候。乍併あまり流行過るはよろしからず。只愚句を氣を付て御覽可被成候。

続いて、最近の升六自身の句「夕顔の朝のこゝろや桶の水」について、他の「宗匠」がつけた解釈を、「されとも愚意は注者の如きごとくしたる案にはあらず」と一蹴した上で、次のように自解する。

夕顔を夕と案しこむがたさに朝としたる也。句意は夕顔棚の下す、ミに一瓢の飲に樂しミをかへぬあるじが、あした起してそこら掃ちぎりて、こゝろ涼しき朝のなかめを朝のこゝろや桶の水とは軽々と申出たり。

確かに、この解説を聞いてみれば、「夕顔」から「瓢箪」を連想し、「瓢箪」から、陋巷で一瓢の飲を樂しんだ孔子の高弟顔回の面影に繋がり、それを俳諧化したものと理解され、同じく夕顔棚を描いた久隅守景の「納涼図屏風」（国宝）なども想起されるのであるが（ここにも瓢箪が描かれている）、しかし、「夕顔の朝のこゝろや桶の水」とだけ聞いて、はたしてそこまで鑑賞できるのだろうか。こうした作者の自解を参照せねば味わえない句作りというのは、如何なものかという疑問は残る。

升六がこの句について「軽々と申出たり」と結んでいるのも注意される。芭蕉最晩年の「軽み」（と升六が考えるところ）の理念が作句の根底にあると見てよいのではないか。【3】で取り上げたように、「柳」を詠んだ芭蕉作品として升六が挙げていたのは、「八九間空て雨ふる柳哉」であるが、これは諸書において元禄七年のものとされ、「続猿蓑」の冒頭歌仙の発句である。「八九間」と言い、「空で」と言ったところに、軽みへの志向を読みとることができよう」という論者もいる^{*17}。

芭蕉晩年の俳諧理念とされる「軽み」をめぐつては、既に『奥の細道』の翌年、元禄三年の「木のもとに汁も膾も桜かな」（『ひさこ』所収）について、「この句の時、師の

いはく、花見の句のかゝりを少し得て、かるみをしたりと也」(『あかさうし』)という、芭蕉の言葉が門人間に伝承されているが、芭蕉の直接の言葉としては、逝去の年である元禄七年に書かれた複数の書簡の中で、次のように繰り返し述べられている¹⁸⁾。

「みの如行が三つ物は、かるみを底に置たるなるべし」
(二月二十五日付許六宛)

「先かるみと興と専に御はげみ、人々にも御申可被下候」(六月二十四日付杉風宛)

「いまだかるみに移り兼、しぶくの俳諧、散々の句のみ」(八月九日付去来宛)

「物体かるみあらはれ大悦不少候」(九月二十三日付意専(猿雖)・土芳宛)

この直後の十月十二日に芭蕉は逝去するので、「軽み」なる理念は芭蕉のたどり着いた文字通り最後の境地と言ってもよいだろう。ただそれが具体的にどのようなものかについては、論者によって説が異なるようだが、ともかくも、「正風道場」の看板を掲げる升六は芭蕉最晩年の「軽み」について自分なりの見解をもった上で、それを実作や門人指導の基盤においていたというのは間違いないことだろう。前

述の升六句「夕顔の朝のこゝろや桶の水」もそのような方向で鑑賞すべきものであろう。

この書簡冒頭「貴簡今十日花屋庵より相達候」とあるのは、前述のごとく花屋庵奇淵のことで、正風道場においては奇淵が升六宛の書簡の取次や投稿句の取りまとめなどをしてきたようである。

文化九年(一八一二)九月一日【7】解題

【7】について筆者は、文化九年のものと年次比定するが、これまでの書簡のように文中に出る書籍の刊行年などによって判断したものではなく、書簡文の内容による推定であることを断っておく。まず、「被懸御心頭、御地之名産一壺、御贈惠御懇志呉々も嬉しく候。朝々養生ニ白粥を食候へは、日毎の菜に致し悦申候。厚御礼申入候」と言っているのは、吐洲から「御地之名産一壺」を贈ってもらったことの礼である。

この「一壺」とは具体的に何かというのと、【9】に「扱御産物之梅干一壺、朝夕粥之菜に相用ひ」とあることにより、梅干であろうと推測され、それは「朝々養生ニ白粥を食候へは」という言葉とも呼応している。

ここで注目されるのは、升六自身が朝夕白粥を食さねばならないほどに衰弱しているということ、それは次の文

面によく繋がっている。

○草庵大望有之、明年類題十萬句集致發行候。此企大駭には候へとも、愚老滅後、諸国之社中文を寄すへき目当も無之をひたすら歎たる門人の誠実より発る処也。忿而其微志を憐みて随分の御取持頼入候。

つまり升六は、既に自身の「愚老滅後」を意識しており、自分の死後、「諸国之社中文を寄すへき目当も無之」ことを危惧して、「明年類題十萬句集致發行候」という「草庵大望」を抱いていたということである。

確認しておくが、升六は文化八年四月から今年文化九年四月にかけてのおよそ一年間で「十萬句」を既に成就していた【4】【11】。それから半年も経たない内に、体調の悪化を自覚した升六は、白粥を啜りながら早くも次の「類題十萬句」を企画しているのである。その俳諧に対する執念は恐るべきものと言つていいだろう。

升六の心中では、「扱明年三月ひらき候。はしめの巻は当九十兩月に致調巻置候へは、此九十月のうち二入句無之は、明年三月の開巻にはもれ候へし」と既に具体化していた。すなわち、来年の三月には「開巻」するので、最初の巻はこの九月・十月中に「調巻」するから、この両月中に

入句されない場合は、来年三月の「開巻」には間に合わないといふのである。

九月・十月と二か月かけて「調巻」とは、具体的には選句と版下作りであろう。それを元にしての木版の制作と印刷作業等に五か月を要するという工程である。もつとも、最初の「開巻」が終わった後でも、入花料さえ添えてあれば引き続き投句を認めるといふ実態は、既に【11】で見ただ通りである。

その料金については、「一千嘯御出句之余は、何程にても無料にて加入致候間」とあり。一千句分の入花料を上限として、それ以上はどれだけ投稿しても無料だという。万句興行では、千句以上出せばそこから無料というのが慣例であろうか。そうすると【11】で書かれていたように「雲州何某一人にて三萬出草有之、前代未聞之珍事也と人々申あへり」などと、一人で三萬句出すような人物も現れるわけである。

それにしても、「愚老滅後、諸国之社中文を寄すへき目当も無之をひたすら歎たる門人の誠実より発る処也」といふのは、いったいどういうことであろうか。升六が死んでしまうと、「諸国之社中文を寄すへき目当も無之」という状態になるという。理屈から言えば、升六がいなくなつても、その高弟が各地の門下を束ねていけばいいようなもの

だが、師匠にはついていたが、そのお弟子さんではいやだということも当然あったに違いない。

また、【3】で指摘したように、地方の同門俳人は、近隣であるにも関わらず、何故か横のつながりというものが希薄なように見受けられる。結局、地方の俳諧愛好家各人は、都市の宗匠の個人的魅力によって、その宗匠個人と精神的・経済的に繋がりを持つだけであって、縦（宗匠の高弟連）にも横（近隣の俳諧愛好家）にも意外に親近感はなく、宗匠の逝去をきっかけとしてその門中を離れるということが普通にあったのではないか。それは当然道場の収入減少に直結することであるから、升六は白粥を啜りつつ心配していたのだろう。

書簡冒頭、「夷則十六日発之花簡、寄淵^マかたより相達候」とある。「寄淵」とは、他の書簡で「花屋庵」と呼ばれる俳諧師菅沼奇淵のことだろう。この人物が升六宛書簡の取次や投句の取りまとめなどを行っていると思われることは前述の通りで、升六の俳書にもその作品がよく採られ、自身でも多くの俳書を刊行している。

文化十年（一八一三）七月二二日【8】解題

【8】についても文意を解釈しての年次比定である。「当庵十万句大はづみにて当節七万目清書最中、過年出来如斯

駿足よりも速く調卷之事二候へは、多分当九月には十万満尾たるへく候。御随喜可被下候」とある「十万句」を、文化九年九月十一日の【7】で言及された「明年類題十万句」と見て、本書簡は文化十年七月二十二日のものと考えられる。この「十万句」は「扱明年三月ひらき候」（【7】）という予定であったから、恐らく予定通りに三月には「開卷」され、七月下旬の段階で「当節七万目清書最中」であるから、後二か月ほど経てば、「多分当九月には十万満尾たるへく候」ということになる。

「過年出来如斯駿足よりも速く調卷之事二候へは」というのは、以前文化八年四月頃企画され、文化九年四月に最初の開卷を迎えた十万句の経過と比べても早いと言っているのだろう。十万句を二年連続して企画し、実施しえたことは途方もないことであるが、「凡俳諧はしまりてより今日迄、更に聞も不及事、前代未聞と可申候」などという手離しの自画自賛にも、月並俳諧宗匠の特徴がよく表れている。宗匠自身は相変わらず大真面目で、「一日俳諧をせされは、三日の流行におくる、と申候」などと吐洲を督励している。

文化十年（一八一三）十一月五日【9】解題

【9】は、「十万句は御察しの通にて、九万目当霜月十一

日開卷相濟、十万目此節清書最中也。はやめてたく十万満尾之事二候」とあるから、【8】に接続するものと考え、文化十年十一月十五日の書簡と推定した。前書簡【8】では、「多分当九月には十万満尾たるへく候」と、九月の満尾を予定していたが、それが年末までずれこんだのは、三月の最初の開巻以降も投稿を受け付けていたからであろう。当初の予定よりは遅れたが、それでも年内に功を終えようとしているのだから大変なものである。

こうした毎年の十万句は道場に莫大な収入をもたらしたようで、「此節正風道場作事最中、大かた出来あかり候へは、極月十日迄には新道場へ引移申候。是浪花俳林之根本也。御随喜可被下候」と、宗匠は新しい「俳諧センター」まで建設してしまった。体調の方は、「扱御産物之梅干一壺、朝夕粥之菜に相用ひ、大二相樂シミ、何よりも致調宝候」と、吐洲から梅干をもらい、朝夕の粥を啜るのは相変わらずだが、手紙の書きぶりには弱ったところはなく、小康を得てそれなりに元気なようだ。

何より升六は、今年の十万句満尾に息つくひまなく、次のような来年の新しいアイデアを既に構想していた。すなわち、「草庵明年月並は趣向立替、四季混雜にて毎年四季類題の句集出版、一ヶ年無懈怠出草のかたへ晋上之事二候」というのである。

月並入句の題を当季に限定せずに募集し、一年かけて集まった「四季混雜」の作品を「四季類題」に分類し直した句集を刊行し、「一ヶ年無懈怠出草のかたへ」進呈するというシステムである。

つまり、単なる月並投稿だけでは月によって投句数に変動があり、それはやはり正風道場の収入に影響するから、「四季類題句集」という年末の「最終目標」を掲げ、それを目指して一年間継続して投句しましょうと呼びかけるものである。これにより、毎月の入花料の増大と安定をはかったであろう。「此月並は京阪無類二候」というから、畿内では全く新しいやり方の方である。「ちらし晋上申候。御世話頼入候」と、やはり「ちらし」を利用した募集形態である。¹⁹⁾

このように、升六宗匠の収入増大の秘計案出は止まるところを知らないようだが、恐らく彼は、翌年の「四季類題句集」を目にすることはなかったろう。なぜなら彼は、翌文化十一年（一八一四）九月三日に逝去するからである。

升六の没年については、従来文化十年あるいは文化十三年などと言われているが²⁰⁾、本稿において文化十一年と訂正する（九月三日没）。その証拠は二つある。一つは、吐洲こと加島英国の直筆と思しき過去帳の「三日」の欄に「文化十一年甲戌九月、正風道場黄花生六居士」とあること、も

う一つは、今回の各書簡の年次比定の結果、升六は文化十年には白粥を啜りながらも依然生存しており、相変わらず十萬句などを差配していたからである。

【升六と吐洲、それぞれの立場】

以上、大坂俳諧宗匠黄花庵升六の吐洲（加島英国）宛書簡十一通を概観した。升六のような大都市の俳諧宗匠が、書簡によるいわば「通信教育」によって、地方の俳諧愛好者をどのように組織化し、盛んに投句するよう仕向けていくのかといった、具体的なやり方が明らかになった。升六自身のナマの言葉が記されたその文面からは、いささか自画自賛・自己陶醉の傾向の強い月並俳諧宗匠の、時に鬼気迫るぐらいの狂熱ぶりが如実に読み取れる。これもまた俳諧文学史のまぎれもない一コマであった。

一方で筆者は、これらがすべて升六の書簡であることから、これらの書簡をいくら読んでも、臼杵の吐洲こと加島英国の姿は特に見えてこないのではないかと当初は危惧していた。しかし冒頭で述べたような、「俳諧」「測量」「年表」という一見全く異なった英国の文化的営為の中に、「類聚」という共通の理念が存在すると気づいた時、升六と吐洲との、足掛け六年にわたる「俳諧通信教育」の中に、いささか別の風景が見えてきた。

集句・集金に明け暮れる升六にしてみれば、自分の言うことをよく聞いてくれる吐洲は、大勢いるもの分かりの良「地方支部長」の一人、一方通行で交際できるありがたい旦那衆の一人であったに違いないが、これを吐洲の側から見ると、状況は随分と変わってくる。

冒頭で述べたように、吐洲は既に文化六年（一八〇九）、豊後俳人の作品を収集し類聚した『俳諧豊後梅』を編纂し、いわば豊後俳壇の全てを掌中に収めている。ちょうどこの年から升六との交際が始まっていることは何も偶然ではなく、『俳諧豊後梅』の完成を持って、従来の八千房系の宗匠から升六へと、吐洲が「乗り換えた」結果だと筆者は考えている。今のところ直接の理由を示す文書などは見つかっていないが、八千房系の俳諧指導や集金システムに満足できなかったのではないか²¹。

つまり吐洲には、既に自律的に宗匠を「乗り換えた」という「俳歴」があるのだが、升六はそれを知ってか知らずか、あるいはそうしたことはどうでもいいのか、「貴庵を正風道場西国の探代に」〔3〕と吐洲を持ち上げ、「浪華は今俳諧の昼」〔2〕で「草庵あまり繁昌過候て」〔4〕などと、手離して「我が世の春」を吹聴し、投句を募る「ちらし」を盛んに発送していた〔2〕〔4〕〔9〕。こうした「宗匠」の言動を、吐洲こと加島英国がどう見ていたか

は問うまい。この時期の彼は、いわば「昼は測量、夜は俳諧」といった生活を送っていたが、その「俳諧」は、升六が考えるようなものだけではなかった。

足掛け六年にわたり、「これに句を出せ、この本を買え、新規投句者を募れ」といった、升六の絶え間なき要求に応じつつ、吐洲はある作業に没頭していた。それは芭蕉から升六に至る俳諧作品を収集し、四季別に分類配置するという、やはり「世界知」を「類聚」する営為で、豊後俳人に限定した『俳諧豊後梅』に比べ、その「世界」が「全日本」に拡大したことは明らかである。

文化十年（一八一三）十一月、升六が来年の企画として、「草庵明年月並は趣向立替、四季混雑にて毎年四季類題の句集出版、一ヶ年無懈怠出草のかたへ晋上之事二候」と、一年分の月並の投句を分類した「四季類題句集」の編纂刊行を打ち出した、ちょうど同じ年、吐洲自身の類聚活動は『俳諧古今明題集』として結実した。芭蕉以来の発句を掌中に分類鑑賞し得た吐洲にとって、業俳・遊俳を問わず升六門人の作品で占められるであろう「四季類題句集」の企画などに、最早新味はなかったろう。五年前、八千房系から正風道場に「乗り換えた」ように、正風道場もまた「乗り換え」「乗り越える」時がきたのである。

翌文化十一年（一八一四）九月三日、黄花庵升六宗匠は、

「浪速俳壇の雄」として「栄光」に包まれた生涯を終えたようだ。終焉の詳細について筆者は何も知らないが、升六の性格を考えあわせれば、自身の終焉を芭蕉のそれにちなげ、「七哲」を枕頭に侍らせての「大往生」を演出したとしても驚くことではない。しかし、升六自身気づく由もなかったが、臼杵の吐洲の文化的興味は、升六の生死などに関係なく、既に月並俳諧の世界そのものから離れていた。吐洲こと加島英国は、自家の過去帳の「三日」の欄に升六の逝去を丁寧にし、以後は、地元の愛好家と俳諧に遊んだり、句碑を建立するようなことはあっても、新たな宗匠につくことはなかった。俳諧の勉強を「卒業」した英国の興味は、更に拡大した「世界知」の「類聚」に向かった。世の中の出来事を全て編年で類聚することにより、「日本」そのものを掌中に一覽しようとする営為、『温故年表録』へと続く道である。

*1 加島英国については、早く『北海道郡教育史』一一三頁以降（昭和七年、北海道郡教育会）に概説があり、近年では『臼杵市史（上）』六四二頁以降（平成二年、臼杵市）に概説されている。現在最も詳細な年譜としては、英国の『桜翁雑録』を翻刻した佐野武夫氏編『桜翁雑録』（昭和五八年、私家版）に掲載される「加

島英国年譜」(昭和十二年五月不知生淵誠一氏写本)がある。

*2 「俳諧之伝系」(ラベル「A4-9」右表3)は縦一九、一
糎×横九六、八糎で以下のような記述である。「俳諧之伝系、
貞徳・季吟・芭蕉翁桃青・宝晋齋其角・半時庵淡々・深茂亭金梓・
八千房駝岳・綵雲亭吐洲・綵雲簫史駐・文字魯恭II(十+田?)。
洲の糸よるほふ雲のそらゆかし。上洛橙舎。寛政十二年申秋五
月上浣日綵雲亭主人」。渡辺南溟の「誓盟」(ラベル「A4-10
―右表3)は縦二二、二糎×横四七、二糎である。いずれも
臼杵市所蔵加島英国資料のうち。

*3 以下、英国の測量活動や年表編纂活動については、前掲注1
の「加島英国年譜」参照。

*4 架蔵の馬琴編『俳諧歳時記』は縦一二、八糎、横一九、〇糎
の横本上下二冊で、一冊の厚みがおよそ二、五糎もある分厚い
体裁、記述は細字で余白なくびっしり書かれている。

*5 加島英国、俳名吐洲の俳諧関係の事跡については、戦前に久
多羅木儀一郎氏「臼杵俳諧史の研究(天明以降藩政末期)」「臼
杵史談」三〇、昭和一四年五月)があり、戦後も同氏「加島吐
洲編著の俳書」(『臼杵史談』四六、昭和三十一年一〇月)などが
ある。近年の高橋長一氏「臼杵物語」(私家版、昭和五十三年一月)
「加島英国と俳諧」は、英国が関係した臼杵俳諧の事跡を要領
よくまとめているが、「右の俳諧関係の記述に就いては臼杵史
談会、産の親の久多羅木儀一郎先生の御研究を基幹として稿し
たものである」(同書四一九頁)という。

江戸期の九州における俳系・俳壇を総覧する大内初夫氏『近
世九州俳壇史の研究』(九州大学出版会、一九八三年二月)

には、その「第七章 半時庵および八千房系と九州俳壇」で吐
洲の名が二か所出てくる。以上の諸著が共通して述べているの
は、吐洲の俳系が半時庵淡々とその門弟八千房に連なるという
ことで、本稿で取り上げる吐洲と黄花庵升六の交流については
従来全く指摘がない。

ちなみに、大内氏前掲書には浩瀚な人名索引がついているが
「升六」の記載自体がない。つまり、臼杵俳壇や加島英国と升
六との関係のみならず、九州の俳諧における升六の影響を報告
する事自体本稿が初めてということになる。もちろん、大内氏
の著書刊行から既に四十年近く経過しており、その間にそうし
た指摘がなかったとは言えず、今後注意すると共に広く示教を
求めたい。

なお、半時庵淡々については、木村三四吾氏「松木淡々」『俳
諧講座3 俳伝人評下』(明治書院、昭和三四年)が詳細で、「抑
洛の俳諧を中興せしも淡々、又邪にせしも淡々なり。夫迄は祖
翁の教に随ひ、付け方を専ら嗜しに、淡は一句一評などとして、
唯一句のたくみを専らにして、強てつけ方に拘らず」という『翁
草』の記述を引く。また淡々の「大阪移住後は、京都から便船
ごとにお茶の水を取りよせ、妓楼出身の女を妾とするなど、京
都時代にもまして豪奢の生活を送り、この方面にもとかく褒貶
常ならぬ有様であった」とする。

*6 一茶の初期の『西国紀行』(寛政七年)に一茶と升六との交
流が見られる。「夜はほのく」と明比、大坂に来る、黄花庵を
主とす。題庭前、相見 松そびえ魚をとりて春を惜む哉」(岩
波文庫『新訂一茶俳句集』二六頁)。引用書の「解説」で校注

者である丸山一彦氏が江戸後期の俳諧の状況について述べている。本稿で取り扱う資料の時代背景や、この時期の俳諧を現代の研究者がどのように見ているのか端的に理解できるので、少し長くなるが次に引用しておく(同書三八五頁)。

当時は(文化・文政期)引用者注)、教育の普及による作句人口の急激な増加とその質的低下が、俳諧の大衆化現象を招いていた。俳諧は今や大衆の手軽な娯楽の一つと化し、その低俗な作句者たちを指導する宗匠もまた、「今世は俳諧宗匠二三百人もこれ有るよし、皆風雅の道は露知らず、期間にして口弁を以て渡世とすることなり」(『塵塚談』文化十一年)と非難された渡世俳諧師たちである。その中には、当時の芭蕉偶像化の風潮に便乗して、芭蕉に仮託したあやしげな秘伝書売りつけ、金銭をむさぼる不心得者なども多かった。しかも一方では、一般大衆相手の月並句合つきなみくわいの懸賞募集句が爆発的な人気を呼んでいた。月並句合の募集は、すべて兼題による題詠であるから、与えられた季題に基づく句作りは、平均化した風雅趣味や季題趣味を蔓延させたのである。

*7 江戸中後期に流行した「月並句合」については、近年益々研究が活況を呈しているようだが、筆者が参照しえたのは以下のような著作である(順不同)。櫻井武次郎氏「月並句合について」大阪市立博物館『三都の俳諧―江戸・京都・大坂』(昭和五七年)。同氏「上方の月並句合」『連歌俳諧研究』五三(一九七七年)。神保五彌氏「書画会・月並句合・春水―化政度・天保期の江戸芸文壇の一面」『国文学研究』四三(一九七一年一月)。

中野沙恵氏「月並句合考」『言語と文芸』九〇(一九八〇年九月)。今柴蔵氏「武州多摩村における月並句合興行の裏面資料」『俳文学論集』(昭和五六年、笠間書院)所収。加藤定彦氏「生成期の月並句合―江戸俳壇を中心に」『国語と国文学』七一―七五(一九九四年五月)。寺島徹氏「翻刻」中興期俳諧月並句合資料―加藤暁台の点取帖・摺物・投句控―『調査研究報告』一九(一九九八年)。

ただし、これらを通覧しても、都市の俳諧宗匠と地方の門弟との月並句合等をめぐる書簡というのはあまり報告がないようだ。よって、今回の升六発吐洲宛書簡はそれなりに研究上の意義がある。一つ残念なのは、升六から吐洲に対して盛んに發送されていたはずの、月並の返草(丁摺、高点句一覽)や春秋の摺物、投句を促す「ちらし」などが、現在の白杵市蔵加島英国資料中に見当たらないことである。現物のイメージを伝えるため、「月並句合」や「万句合」の「ちらし」を参考資料1: 参考資料2として付載した(加蔵)。

*8 『続猿蓑』の成立について、堀切実氏「俳聖芭蕉と俳魔支考」(角川選書三九二、平成一八年)一五九頁は、「実質的には芭蕉原撰・支考加修補撰という見方が定説化している。ただし、その支考の加修の程度をめぐっては、なお、問題を多く残しているのである」とする。

*9 『柳草紙』は「日本古典籍総合目録データベース」では「やなき草子」と記載される。その序文と跋文を次に掲げておく。序文中に、柳の美点として「けハひかさるぬめりなければ」(氣配飾るぬめり無ければ)とあるのは、書簡【3】で升六自身の

「流行」観として、「いやミぬめりなくしてさらくくとやすく」という理念と同じである。升六は俳諧において「ぬめり」を嫌ったのである。

『やなき草子』序文

やなきといふものほと世にめてたきはあらしかし。そもはるたち初るより青くとして長閑に、花もなく、香もなく、けハひかざるぬめりなければ、四ときおなしさまにうらくと安し、水に添ひ、ものにしたかひ、いさ、か逆らふなく、晴る、あしたも曇ゆふへも、長々とほそくたれて、風におかし、雨によるし。あか廬の風雅もかうやうにめてたかれとて、此亭の日記を柳草紙とは沙汰し申ける。柳には春たつ際もなかりけり。文化六と算る春むつみ月、正風道場にして升六書。

『やなき草子』跋文

此さうしはこの亭に俳諧の祭日を有ことにさためてかしこまる、其日はねちき癖ある人々つとひあつまり、ともにおかしきひと節を高くも低うもうたひかなて、絶えずも遊へるほかに、おのつからとこしなへに成ぬ。柳のちりはひと、せふるを、ありのま、かきあつめたれば、浜のまさこの塊かちに、捨るものぞ多かむめる、そを遠くちかくしるしらぬ家々におくりて風雅のちなみ草とし、柳のいと結び二なきましましハりをなむなしたまへやと、せちにさうし、ぬしをす、め申ものは、おなし程により添える二有、右筆してこれをかく。

*10

前掲注7 櫻井武次郎氏「上方の月並句合」に次のようにある(傍線は引用者による)。「もともと月並句合は、俳諧の勉強のために開かれた月並句会をその発祥の母体としている。正風道

場升六の月並句合にしても、地方在住の者たちに刺激を与える目的で始められたようで、俳諧堂来稻にしたって同様であったはずの正価的意図を無視してはならない。升六は、各年毎の類題句集『二葉草』を享和三年から編み始めるし(後略)。よって、「日本古典籍総合目録データベース」で、『二葉草』の「成立年」を「文化七刊」と限定するのは妥当ではない。

*11

こうした升六の「丁摺」を一年分ためてこよりで綴じたものや(寛政十二年)、一年分の丁摺を『年としふり』と題して刊行していたことなどが、櫻井武次郎氏「升六の丁摺と『年としふり』付・芭蕉二百回忌、再三」(大阪俳文学研究会)会報』三六(二〇〇二年一〇月)に紹介されており、「月並句合が、当初は結社の練習のために企図されたもので、後に遊戯化していったものであろう」とする。また、『年としふり』の一冊は「升六の歿するまで文化六七・八九年のいずれかの年次のものであろう」とのことなので、ちょうど吐洲が交際していた時期と重なるが、現在の白杵市所蔵加島英国資料の中に、こうしたものが見当たらないのは残念である。

*12

升六と吐洲の橋渡し役をした嗅英とは、吐洲に「無々庵」号を譲った人物である。前掲注5の高橋長一氏「白杵物語」四〇五頁に「岡部無々庵嗅英」として、「百石岡部権左衛門と言い馬廻役で上士で岡部七家の一家であった。いかめしい百石取の上士であり乍ら風流の道にも心を寄せていた。絵もよく描き郡上八幡合戦屏風が残っている。俳諧も亦深く究め、無々庵嗅英と号した」として、享和二年(一八〇二)の無々庵号譲状

を紹介している。その文面によると嗅英は八千坊駱岳から無々庵の額、印石などを伝授されたという。前掲注9の升六編『やなぎ草子』（文化六年自序）には、「ウスキ嗅英」として「夕雲や笹を出るかんことり」が採られている。吐洲の句は見えないから、吐洲の升六への投句はこれ以降であることがわかる。

*13 この「豊後高田春波」とは、日田の広瀬月化より「東月齋春坡」の号をもらった金谷佛水（かみやぶつすい）（？々文政十年）のことであろう。前掲注5の大内初夫氏『近世九州俳壇史の研究』四〇六頁に、「月化（日田の俳人広瀬月化―引用者注）の前号静齋を継いだのは、淡窓に「師弟ノ義ニ厚キコト是人ヲ以テ第一トス」（懐旧楼筆記）」といわれた豊後高田の佛水である。豊前住江の医高橋了味の男で、豊後高田の商人金谷家（屋号粧屋）の養子となった人である。俳諧は初め魯雪（または鷺雪）と号し、のち月化に入門して東月齋春坡と改めた。後号は佛水、晩年はさらに佛水を用いた。俳諧に精進すること最も熱心で伊予の栲堂の教えも受けている」とある。

*14 富田志津子氏「淡々判の高判集」『待兼山論叢文学篇』一八（一九八四年）。富田氏は更に淡々自身について、「彼（半時庵淡々のこと―引用者注）は『翁草』をはじめ、『東臈子』や『宝曆雜録』などの当時の随筆類に、しばしば名利を追い求める俗物として描かれている。（中略）それらの随筆に加えて、現在多く残されている淡々の秘伝書や系図なども、地位や名誉を重視した彼の姿を物語っている」と説く。

*15 『流行百家句集』春夏秋冬全四冊は、春四十六丁・夏三十八丁・秋三十九丁・冬三十三丁。ただし、春・夏は通しの丁付で

八十四丁、秋・冬は通しの丁付で七十二丁であることから、まづ春・夏が刊行され、次に秋・冬が刊行されたか。半丁十行、一行一句の形式であるから、単純計算で三千百二十句となる（実際にはこれより少ない）。刊記・序跋はなく、冬の末尾に「和書俳書目録塩屋忠兵衛板」計六丁が付く。

吐洲の句は二十八句検出された。これは書簡〔2〕に「二十七句致加集候」とあることとほぼ符合する。一人の入句数は当然当人の入花料と直結するから、人別の入句数を升六は詳細に記録していたのである。この時の入花料の規定は定かでないが、注19の安政六年刊『俳林良材集』の場合、その「ちらし」には、「右題之内二而八句入刻料入捨金貳朱、三句入同金壹朱、一句入同銀式匁、余は准之」とある（注7中野沙恵氏「月並句合考」）。『流行百家句集』は今日比較的稀覯本で、吐洲の作品の実際と升六の選句の傾向を知るため、吐洲の入句計二十八句を次に列挙しておく。句頭の番号は、松宇文庫蔵本の写真（国文学研究資料館撮影）のコマ数であって、丁数ではない。（ ）内は題である。

一月6人の来て豊ほめたる暁月哉（暁月）

8 三日過て正月となるこゝろ哉（三日）

12 敷入に起よくつくや嗟峨の鐘（敷入）

三月45油断して桜は花と成にけり（花）

四月5青簾花ちらしたる風か吹（青簾）

8 眼のおよふだけは月あり夏（夏海）

12 さし汐やあかるきかたにきやうくし（行々子）

18 大膽に花の咲たるいはらかな（茨花）

五月18世の中を草の家にさす五月哉（端午）

19 軒先やあやめ落して啼す、め（暮あやめ）

20 五月雨やふる着か、へる持おもり（五月雨）

24 萍や蔓をたくれば行く来る（萍花）

27 打れたる蠅見て蠅の居にけり（蠅）

六月30 六月や都の春と成にけり（六月）

31 桐の葉の流れて来たり川社（川社）

35 其ま、に膳居らる、端居かな（端居）

38 水と樹のふたつ揃へハ蟬のこゑ（蟬）

七月3 灯あたりの七月となる都哉（七月）

4 秋立て三日た、ぬに月夜かな（立秋）

5 七夕とはやし立るも夜成けり（七夕）

6 初月夜寝冷の癖か付にけり（初月）

6 盆のこ只淋しかる鵜飼か子（盆月）

10 大粒の雨の夜明を秋のかせ（秋風）

23 三日月の見る間に山と成にけり（三日月）

25 朔（？）の日もある秋の夕かな（秋夕）

25 朝寒や畳にさハる膝かしら（朝寒）

30 雁啼や油火はちく宵（？）の宿（雁）

十二月34 春待やいつも寝て居る角力取（春待）

*16 『新深川集』は「日本古典籍総合目録データベース」によれば「文化九刊」とされるが、刊記・序跋なく刊行年判定の根拠は明確でない。本稿で紹介する書簡【2】【5】【6】の記述により文化九年刊が裏付けられる。『日本俳書大系 近世俳諧名家集』（日本俳書大系刊行会、一九二七年）所収。吐洲の句は「夏

部」に「青簾花ちらしたる風が吹 豊後吐洲」と一句採られる。

*17 山本健吉氏『芭蕉全発句』六五四頁（講談社学術文庫、二〇一二年）。

*18 芭蕉書簡の引用は、萩原恭男氏校注『芭蕉書簡集』（岩波文庫、一九七六年）に拠る。

*19 「四季類題句集」を升六が企画した文化十年（一八一三）より半世紀も下る関東の事例であるが、安政六年（一八五九）刊

の双雀庵氷壺編『俳林良材集』（四季各上下二冊で、合計八冊）は、まさに「四季類題句集」と言える内容で、これを編纂する

に当たって投句を募集する「ちらし」（縦一四・七糎×横三九・五糎）の存在が、前掲注7の中野沙恵氏「月並句合考」に紹介

されており、これによれば「八月十五日メ切」で「来午年二月迄二は開板いたし候」とある。「午」は安政五年なので、安政

四年の八月に締め切った後、半年程度で集句・整版・刊行まで行う予定である。書簡【7】で分析した「万句合」の工程を踏

まえると、選句と版下作りに二か月ほどを見込んでいるか。

架蔵本の丁付（板心でなくノドにある）によると本文の丁

数はそれぞれ「春上下」百三丁、「夏上下」百六丁、「秋上下」

九四丁、「冬上下」百丁で合計四百三丁、半丁九行、一行一句

宛であるから、単純計算で七千二百五十四句、実際には催事の

説明が入るので句数はこれより減少し七千句程度か。「夏下」

末尾には「安政五戊午年林鐘新刻」との刊記があるが、「夏上」

には「安政六とせ正月十三日」の「柯堂のあるし文雄」の序文

が付けられている。「秋上」「冬上」にも安政六年の序文がある

ので（「春上」の序文は安政五年）、安政五年二月の刊行予定は

林鐘（七月）にまでずれ込んで「春」「夏」のみ刊行され、翌年に各冊に序文をつけ、改めて全部の刊行を見たものだろう。刊記には「三都書林」計八名が名を連ねる。なお上記の「柯堂のあるし文雄」が歌人の井上文雄であることについては、鈴木亮氏「井上文雄研究史・補遺（其ノ四）」『成蹊人文研究』三〇（令和四年三月）に指摘がある。

*20 『俳諧大辞典』（明治書院、昭和五十二年二十版）三三三九頁中では「文化十三年九月三日歿贅川他石説、享年未詳」とあり、『俳文学大辞典』（角川書店、平成七年初版）では「文化一〇（一八一三）・九・三」とする。いずれも誤りであった。

*21 ただし、八千坊門の年刊句集『文化十一甲戌青陽帖』に吐洲の名が見えるから、八千坊系と吐洲の關係が完全に切れていたわけではないようだ。前掲注5大内初夫氏『近世九州俳壇史の研究』三九三頁参照。

【付記】

本論はISPS 科研費「臼杵市加島家資料の総合的研究」（課題番号 JP18K00323：研究代表者、鈴木 元）の成果の一部である。



俳諧の摺物の例。縦 19.0 糎×横 25.3 糎。「丁卯春」= 慶応三年 = 明治元年のもの（架蔵）